北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 19, 117-139, 2021.

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の文頭句について*

塩谷　亨

Sentence-Initial Phrases in Samoan, Tahitian and Hawaiian

Toru SHIONOYA

要旨：本稿では、同じポリネシア諸語に属する三つの同系言語、サモア語、タヒチ語、ハワイ語について、文頭にどのような要素が現れるのか比較した。その結果、文頭で用いる前置詞について、サモア語では一貫して前置詞‘o が用いられるのに対し、タヒチ語やハワイ語ではそれ以外の前置詞を用いる比率が高くなっていること、タヒチ語ではハワイ語に比べて定冠詞や指示詞の文頭での出現率が高いこと、時制・相指標が付加されていない動詞の文頭での出現率がサモア語において特に低く、逆にハワイ語で高めになっていること、が明らかになった。また、このような出現率の違いについて、同様の環境・意味でそれぞれの言語が異なる構造を用いて表現していることが要因となっていると説明できることを示した上で、それぞれの言語がもっている文構成上のいくつかの原則を示した。

キーワード：サモア語　タヒチ語　ハワイ語　対照研究　文頭句

1.　序論

1.1.　本稿の目的

ポリネシア諸語は起源を同じくする言語のグループであり、サモア語、タヒチ語、ハワイ語はその中に属している。このうち、タヒチ語とハワイ語は東部ポリネシア諸語という同じ下位グループに属しており、より近い関係にある。同系であるため、共有する文法的特徴も多いが、その一方で、例えば、タヒチ語やハワイ語では対格型の格表示であるのに対して、サモア語には能格型の格表示が見られる（Mosel and Hovdhaugen 1992:53）等、顕著な文法上の違いも存在する。本稿では、文頭にどのような句が現れるのかに着目して、三つの言語間の類似点、相違点を示すとともに、それぞれの言語特有の文法的な特徴、及びそれぞれの言語における文を構成する上での原則の一端を明らかにすることを目的とする。

1.2.　文構造の概略と本稿での考察の着眼点

ポリネシア諸語の大部分は基本語順が VSO であり、述語が文頭に来て、その後ろ

に、主語、その他の名詞句という語順が原則である。ポリネシア諸語の祖先であるポリネシア祖語に想定される文の構造及び文頭要素については、以下のような原則が示されている。

(1) ポリネシア祖語の文の構造の特徴(Clark 1976:29 及び 38)

a)全てのポリネシア祖語の文は述語をもち、一部の文は述語のみかなら成る。

b)接続詞とトピックが来る場合を除き、述語が文頭に来る。その後ろに一つ或いは二つ以上の名詞句が続く。

c)名詞句にはその（述語に対する）文法機能を示す前置詞が付加される。

d)トピックは述語に先行し前置詞*ko がその印として付加される。

多くの現代ポリネシア諸語においても上記の原則は継承されており、今回の分析対象となるサモア語、タヒチ語、ハワイ語でも同様である。すなわち、これらの三言語においても、述語、前置詞‘o（ポリネシア祖語の前置詞*ko は、サモア語、タヒチ語、ハワイ語のいずれにおいても同じ形‘o として反映している）が付加されたトピック、又は接続詞は、文頭に頻繁に現れる。以下に、ハワイ語で例示する [1]。尚、いずれの言語でも、動詞句の基本的な構造は＜時制・相指標ー動詞ー方向詞ー指示詞＞、名詞句の基本的な構造は＜前置詞ー限定辞（指示詞/所有形/複数指標等）ー名詞＞であり、中核要素である動詞と名詞以外は必須要素ではない。

動詞述語の例（述語部分を下線で表示）

(2)(H) Ua ‘ai　　ke kanaka i　ka poi.

PF[2] 食べる DF 人　AC DF ポイ

「人がポイ（タロイモをつぶした料理）を食べた。」Elbert and Pukui (1979:39)

名詞述語の例（述語部分を下線で表示）

(3)(H) ‘O Kimo ko‘u　inoa.

NC Kimo 私の 名前

「私の名前は Kimo だ。」Elbert and Pukui (1979:120)

文頭にトピックが置かれている例（述語部分を下線、トピック部分を二重下線で表示）

(4)(H) ‘O kēia　wahine u‘i,　ua hele　a　wīwī　‘ino　a　po‘opo‘o nā maka.

NC この 女性 美しい PF 行く CN 痩せる ひどく CN 窪む　PL 目

「この美しい女性は、ひどく痩せて目が窪んでしまった。」

Pukui & Green (1995:149)

述語に等位接続詞が付加されている例（述語部分を下線、接続詞を二重下線で表示）

(5)(H) A　ua　iho　aku nei　lāua　　i　lalo.

CN PF 降りる DR DM 彼ら二人 LD 下

「そして、彼ら二人は下に降りた。」Pukui & Green (1995:147)

上記（1）の原則だけを見ると、どんな要素が文頭に来るのかについての状況は極めて類似しているはずであるが、実際にはそうではなく、三言語の間で大きな差異が見られる場合がある。例えば、述語が文頭に来るという原則は共通だとしても、特に名詞述語の形式上の制限、すなわち、どんな構造が許容されるのかについては言語によって異なる。また、言語によっては、トピックに、前置詞‘o（ポリネシア祖語の*koの反映形）が付加されない場合もあり、更には、トピック以外の非述語要素が文頭に来る場合もある。本稿では、このような、上述（1）の原則に含まれる部分に加えて、その原則から外れる部分にも特に注目して、どのような要素がサモア語、タヒチ語、ハワイ語において文頭に現れるのかについて、それぞれの出現率を比較した上で、その出現率の違いの要因はどのようなものであると考えられるのか考察する。

1.3. 分析データ

今回は、文字資料、具体的には物語テキストをデータとして用いた。文字資料を用いた理由は大きく二つである。第一に、ハワイ語ではネイティブスピーカーとの調査が難しいため、条件を揃えるには、三言語とも文字資料にする必要がある。第二に、文頭要素の比較のためには文という単位で見る必要が有るが、文という単位は話し言葉よりは書き言葉で意識される傾向が強く、また、句読点が文の単位の確定の大きな手掛かりとなるため、書き言葉の方が文を抽出しやすいということがある。

今回分析データとして用いたのはそれぞれの言語で書かれた物語集である。サモア語の分析データとして用いた Steubel and Herman(1987)はサモアの物語集の代表的なものでサモアの歴史、伝統、貴族にまつわるさまざまな物語が含まれている。ハワイ語の分析データとして用いた Pukui and Green (1995)は祖母や母から語り継がれたハワイの物語を集めたもので、神話、貴族、庶民に関わる様々な物語が含まれている。タヒチ語については一冊でまとまった分量が揃わなかったため、小さな書籍を複数用いた。まず、Cuneo (undated a-f)及び Collection Fenua(undated a-b)はタヒチで出版された物語のシリーズであり、主に庶民の暮らしにまつわる物語である。出版年は明記されていないが、おそらく 2008 年頃からパペエテ市内（タヒチ島）の書店で販売されてたと思われる新しい出版物であり、今回分析に用いたものはいずれも 2010 年に現地で購入したものである。Heuberger et al. (1994)、Bodin (2018a-b, 2019)はタヒチの神話、貴族に関する物語、Marcedo (2000)は動物を主人公にした話である。

1.4. 本稿の構成

第 2 章では、各言語でどのような要素が文頭に現れるか列挙した上でそれぞれの要素の出現率を比較する。第 3 章では、ある言語で文頭に現れる要素が他の言語のどの要素に対応しているか対照する。第 4 章では、文頭にどのような要素が来るのかについての、それぞれの言語での原則について考察する。

2.　文頭に現れる各要素とその出現率の比較

2.1.　文という単位について

文頭に現れる要素を対照する際には、文という単位を確定する必要が有る。今回は、そもそも文とは何かについての議論には踏みこまず、書き言葉とデータを分析する上での文の単位の基準として可能な限り客観的な指針を定めることを目的とする。尚、本稿では、大前提として、あらゆる文には必ず述語が含まれる（主語は明示的に存在しない可能性がある）という立場を取る。

今回の分析での文という単位を確定するための基準及び分析の際の指針を以下の様に設定する。

(6) 本稿における文という単位の確定基準及び分析の際の指針

a) ピリオド、コロン、セミコロン、疑問符、感嘆符、引用符を文の境界とする。ただし文中で短い語句を引用している場合の引用符は除く。

b) 呼びかけは述語を含んでいないと考えて除外する。呼びかけの後ろに述語を含む文が続いている場合には、呼びかけ部分を除外し、その直後の要素を文頭とみなす。

c) 間投詞が単独で用いられる場合は、述語を含んでいないと考えて除外する。間投詞の後ろに述語を含む文が続いている場合には、間投詞部分を除外し、その直後の要素を文頭とみなす。ただし、間投詞が動詞として用いられる場合があり、その場合は動詞として扱う。

d) 物語のタイトルや見出し、及び、コロンの後に、語句をリスト的に列挙したり、前の文の補足や言い換えの語句を追加的に提示したものについては、完全な文の形となっていない場合があるため除外した。

上記の(6)a)について、例えば、例(7)のような場合には、引用符に囲まれた部分を一つの文とみなすが、例(8)の引用符で囲まれた部分は語句を文中で引用しているので一つの文としてはみなさない。

(7)(S) Ua　tali　mai tamaitai, “O　le　a　ea　lou　gasegase?”
PF 答える DR 女性　NC DF 何 QU あなたの 病気
「女性は答えた、『あなたの病気は何ですか』。」Stuebel and Herman (1987:15)

(8)(S) Ua　igoa　fo‘i lea　fanua "‘O　Matanonofo" ua　o‘o　mai　i　ona　po　nei.
PF 名付ける EP この 土地　NC　M.　PF 至る DR　LD それの 日 この
「この土地は Matanonofo と名付けられて、今日に至っている。」
Stuebel and Herman (1987:42)

(6)の b)と c)に関して、例えば、例(9)や(11)のように呼びかけや間投詞が単独で用いられている場合は除外し、例(11)や(12)のように、直後に述語を含む文が続く場合には呼びかけや間投

詞部分を除外しその直後からを文として分析に加えた。

(9)(T) E te mau Atua o te ra‘i !
VC DF PL 神 PO DF 天
「天の神々よ」Bodin (2019:17)

(10)(H) ‘Ae!.
はい
「はい」Pukui & Green (1995:133)

(11)(T) ‘E Honu iti ē, teie te ava, ‘a haere rā …
VC 亀 小さい~よ これ DF 水路 CM 行く今
「子亀よ、これが水路だ、さあ行きなさい…」Maced (2000:15)

(12)(H) ‘Ae, he mea ‘oia‘i‘o kēnā.
はい ID こと 本当の それ
「はい、それは本当のことだ。」 Pukui & Green (1995:128)

(6)d)については、例えば、例(13)のセミコロン以下の部分はリスト形式で列挙しているだけで述語を含む文の形式ではないので除外した。

(13)(H) ‘Ike mai nei lāua i nā ‘ono like ‘ole o ke kai; ka ‘opihi, ka wana, ka he‘e,
見る DR DM 彼女達 AC PL 珍味 同じ NG PO DF 海 DF オピヒ貝 DF ウニ DF タコ
limu, hā‘uke‘uke, ‘o ka i‘a nō ho‘i;
海藻 ウニ(別種) NC DF 魚 EP
「彼女たちは海の様々な珍味を見た;オピヒ貝、ウニ、タコ、ウニ（別種)、魚も。」
Pukui & Green (1995:128)

2.2. サモア語において文頭に現れる要素

今回分析したサモア語データは合計 2201 文であった。文頭での出現が確認されたのは、接続詞、前置詞、名詞（前置詞が前置されていないもの)、疑問詞、時制・相指標、動詞（時制・相指標が前置されていないもの)、前置副詞（述語の前に付加される副詞)、疑問の指標 pē/po（日本語の疑問文や選択表現で用いられる「~か」に対応するもの)、連続して起こるイベントを表す表現（「そして、それから…」）を導く ona である。

接続詞が文頭に現れた例は 177 例であった。例(14)、(15)はそれぞれ、等位接続詞 a「そして」、従属接続詞 afai「もし」の例である。

(14)(S) A ua sosola pea i latou.
CN PF 逃げる 続けて 彼ら
「そして、彼らは逃げ続けた。」Stuebel and Herman (1987:66)

(15)(S) Afai e　lē　matai,　ona fasioti lea　‘o　i laua.
もし GN NG できる　SQ 殺す　DM NC 彼ら二人
「もし出来なければ、彼らは殺される。」Stuebel and Herman (1987:41)

これ以外にも‘ae「しかし」、ma「そして」、seiloga「もし…でなければ」が文頭に現れる例があった。

前置詞としては、ほぼ全ての例（394 例）が‘o（neutral case）の例であった（例(16)）が、それ以外に i 前置詞（場所/方向）の例がわずか 1 例（例(17)）見られた。

(16)(S) ‘O le　ulu　lenei.
NC DF パンの実　これ
「これはパンの実です。」Stuebel and Herman (1987:11)

(17)(S) I　le　ma le　tasi,　ua i ai　se fa‘ailoga i　gatai　o　le ‘a‘ai, ‘o　ma‘a tetele.
LD DF ~と DF 一つ　PF 在る ID 印　LD 海側 PO DF 村　NC 岩　大きい
「もう一つには、村の海側に一つの印がある、（それは）大きな岩だ。」
Stuebel and Herman (1987:57)

前置詞が付加されない名詞が文頭に現れる例も数は少ないが見られた。不定冠詞が文頭に来る例が 3 例あり(例(18))、その他 2 例が、所有形が文頭に来る例であった（例(19)）。

(18)(S) Se fanau　oulua　a　ai?
ID 子供あなた達 PO 誰
「お前たちは誰の子供だ。」Stuebel and Herman (1987:13)

(19)(S) Lou　tufa‘aga lena.
あなたの　一部　それ
「それは俺の一部だ。」Stuebel and Herman (1987:89)

尚、例(18)は疑問文であるが、不定冠詞が文頭に来る例（3 例）は全て疑問文であった。

疑問詞が文頭に現れる例が 2 例あった(例(20))。いずれも、疑問詞は fa‘apefea「どのような」の例であった。

(20)(S) Fa‘apefea　le　pule　a　ali‘i i　tagata ma le　lau‘ele‘ele o　le nu‘u?
どのような DF 権力 PO 領主 LD 人　~と DF 土地　PO DF 村
「領主の人々と土地に対する権力はどんなものか。」
Stuebel and Herman (1987:74)

時制・相指標は動詞の前に付加される後接語であるが、それらが文頭に現れる例が 1078

例あった。そのほとんど全てが動詞の前に時制・相指標が付加された事例であったが（例(21)）、前置詞が付加された名詞句が動詞的に用いられてその前に時制・相指標が付加されている例が 2 例あった（例(22)）。

(21)(S) Sa tali atu Matuna, ...
PT 答える DR M.
「Matuna が答えた、...」Stuebel and Herman (1987:36)

(22)(S) ‘O i ina na fanau ai le isi a la tama.
PO LD ここ PT 産む AP DF 別のもの 彼らの 子供
「彼らのもう一人の子供が生まれたのはここでだ。」Stuebel and Herman (1987:29)

尚、前置詞が付加された名詞句が動詞的に用いられてその前に時制・相指標が付加されている例は 2 例とも、時制・相指標は‘olo‘o（現在）の短縮形‘o であった。

時制・相指標が付加されていない動詞が文頭に現れる文は 113 例あった（例(23)）。

(23)(S)Malama ae le taeao, ua tau le taua.
明ける DR DF 朝 PF 戦う DF 戦い
「夜が明けた、戦いが戦われた。」Stuebel and Herman (1987:31)

例(23)は過去のイベントを表していたが、時制・相指標が付加されていない動詞は、命令形としても頻繁に用いられる（例(24)）。

(24)(S)Alu, alu ese ia.
行く 行く 遠くに EP
「行け、遠くに行け。」Stuebel and Herman (1987:38)

タヒチ語とハワイ語に見られないサモア語特有の構造として、前の文のイベントに連続して起こるイベントを提示する表現がある。それは、＜ona 動詞 (ai) lea＞「そしてそれから…」であり、サモア語、特に物語文では頻繁に用いられるものである。この構造の冒頭部分 ona が文頭に現れている例が 402 例あった（例(25)の二つ目の文、下線で表記）。

(25)(S) Na fanau sa la tama, ‘o le pusi. <u>Ona lafo lea i le sami</u>.
PT 産む 彼らの子供 NC DF ウナギ SQ 投げる DM LD DF 海
「彼らの子供が生まれた、ウナギだった。そして海に投げ捨てた。」
Stuebel and Herman (1987:33)

例(25)では、前の文のイベント（子供がウナギとして生まれた）に連続して起こったイベン

ト（それを海に捨てた）を ona に始まる文が表しているが、上記のように、文字上も、ピリオドにより明確に区切られ、一つの文として書かれている。

同様に、サモア語特有の要素である疑問の指標 *pē/po* が文頭に現れている例が 11 例あった。疑問の指標 pē/po は疑問を表す場合（例(26)）と選択表現「A か B か」の「か」に相当する意味を表す場合（例(27)）がある。

(26)(S) Po ‘o le a lea?
QU NC DF 何これ
「これは何だ。」Stuebel and Herman (1987:24)

(27)(S) Pe lua pe tolu ni foto e faatutu ai.
QU 二つ QU 三つ ID-PL 棘 GN 設定する AP
「二つか三つか棘を仕掛けた。」Stuebel and Herman (1987:48)

もう一つ、サモア語特有の要素として、前置副詞がある。多くの副詞的要素は文頭ではなく文中や文末に現れるが、一部の副詞は述語よりも前に現れる。文頭に前置副詞が現れる例が 16 例あった（例(28)）。

(28)(S) ‘Ai sa mālōa le maota nei?
おそらく PT 来客がある DF 家 この
「おそらくこの家は来客があったのか。」Stuebel and Herman (1987:73)

例(28)では文頭の‘ai「おそらく」が前置副詞である。この他、‘atonu「多分」、fa‘atoa「ちょうど」、matua「とても」、na ‘o「だけ」、peita‘i「しかしながら」の例があった。

2.3. タヒチ語において文頭に現れる要素

今回分析したタヒチ語データは合計 485 文であった。文頭での出現が確認されたのは、接続詞、前置詞、名詞（前置詞が前置されていないもの）、時制・相指標、動詞（時制・相指標が前置されていないもの）、数詞である。

接続詞が文頭に現れた例は 13 例であった。例(29)、(30)はそれぞれ、等位接続詞‘e「そして」、従属接続詞‘ahiri「もし」の例である。

(29)(T) ‘E ua haere atura teie i‘a na ni‘a i te miti.
そして PF 行く DR-DM この 魚 LD 上 LD DF 海
「そしてこの魚は海の上を行った。」Bodin (2019:9)

(30)(T) Aue ‘aiū e, ‘ahiri pa‘i e ‘itere tō ‘oe mai tō‘u, ua ‘au ia
おお 幼子 VC もし EP ID ひれ あなたの ~のような 私の PF 泳ぐ AP

tāua i tahatai.
私達二人 LD 岸
「おおかわいい子よ、もしあなたに私のようなヒレがあれば、一緒に岸まで泳げるのだが。」Cuneo (undated a:6)

例(30)は”Aue ‘aiū e”「おおかわいい子よ」という呼びかけで始まっているが、(6)で示した指針に従い、呼びかけ部分は除外して、その直後の従属接続詞‘ahiri を文頭として分析している。

前置詞としては、17 例が‘o（neutral case）の例であり（例(31)）、i 前置詞（場所/方向）の例が 45 例（例(32)）見られた。それ以外の前置詞の例が計 30 例あった。

(31)(T) ‘O Rataro ta‘u i‘oa.
NC R. my name
「私の名前は Rataro です。」Cuneo (undated d :3)

(32)(T) I ‘ō nei ta‘u ‘a‘amu e ha‘amata ai.
LD ここ 私の 物語 IP 始まる AP
「私の物語が始まるのはここだ。」Cuneo (undated c :4)

‘o と i 以外の前置詞としては、no「所有/理由・原因」（例(33)）が 57 例あった他、ma「~と共に」、mai「~のように」、na（所有）が文頭で用いられる例も見られた。

(33)(T) No te mā‘a paha ‘o ia i haere mai ai.
PO DF 食べ物 多分 それ PF 来る DR AP
「それが来たのは多分食べ物のせいだ。」Cuneo (undated e:8)

もう一つ pēnei a‘e「多分」という表現が文頭に現れる例が 1 例あったが（例(34)）、本稿ではそれも前置詞の事例に加える。これは Elbert and Pukui(1979:150)によるハワイの語の pēnei の前半部分 pē-を類似性の(simulative)前置詞、後半部分-nei を指示詞「これ」とする分析を採用したものである。

(34)(T) Pēnei a‘e matou i te farerei fa‘ahou ia tae i te hō‘e mahana ‘o vai i
このように DR 私達 LD DF 会う 再び OP 至る LD DF 一つの 日 NC 誰 PF
‘ite noa atu ?
分かる EP DR
「多分、いつか私達は再び会うかもしれない、（そのようなことが）誰に分かるか。」Cuneo (undated f:13)

尚、タヒチ語ではこの pē はこの pēnei ae「多分」という慣用表現でしか現れないが、次節で

述べるように、ハワイ語では、pēnei「このように」、pēla「そのように」、pehea「どのように」等の事例がある。

名詞（前置詞が付加されないもの）が文頭に来る例の大部分は、不定冠詞が付加された名詞で 44 例あり(例(35))、それ以外には、指示詞が付加された名詞が 23 例あった他(例(36))、定冠詞が付加された名詞が 10 例あった(例(37))。また、名詞 mea「もの/こと」が何も限定詞が付加されずそのまま直接文頭に来る場合が 4 例あった(例(38))。

(35)(T) E　pa‘ati　na‘ina‘i　roa　‘o　Tini.
ID ブダイ 小さい とても NC T.
「Tini はとてもちいさいブダイだ。」Cuneo (undated a :3)

(36)(T) Teie te　to‘i TEPAHURUNUIMATEVAITAU !
これ DF 斧　T.
「これは Tepahurunuimatevaitau という斧だ。」Bodin (2019 :21)

(37)(T) Te i‘oa　o　te upo‘o o　te　i‘a ‘o TAIARAPU.
DF 名前 PO DF 頭　PS DF 魚 NC T.
「魚の頭部の名前が Taiarapu だ。」Bodin (2019 :27)

(38)(T) Mea pāpū　ihoā　ē　te mauiui　nei ‘ōna!
こと 明確な DR-EP こと PS 痛い　DM それ
「それが痛がっていることはとても明らか（なこと）だ。」Cuneo (undated f :8)

時制・相指標が文頭に現れる例が 198 例あった。そのほとんど全てが動詞の前に時制・相指標が付加された事例であったが（例(39)）、時制・相指標と前置詞の融合形が文頭に現れているもの（例(40)）が 10 例が含まれていた。

(39)(T) ‘Ua rave ihora　‘oia i　te　ho‘ē ‘ōfa‘i no　te vāhi　iāna.
PF 取る DR-DM 彼 AC DF 一つ 石　PS DF 割る AC-それ
「彼はそれを割るために、一つの石を取った。」Bodin (2018a :9)

(40)(T) Tei　roto matou i　te ‘aua.
PS-LD 中　私達　LD DF 庭
「私達は庭の中にいる。」Cuneo (undated e :5)

例(39)で用いられていた‘ua（完了）以外に文頭で確認された時制・相指標の例は、e（未完了）、te（現在）、‘a（起動相）、‘ia（願望相）である。例(40)の tei は時制・相指標 te（現在）と前置詞 i（場所/方向）の融合形である。

時制・相指標が付加されず、直に、動詞が文頭に現れる文は 109 例あった（例(41)）。そのうち、18 例は時制・相指標とは共起しない否定動詞が文頭に来るもの（例(42)）である。

(41)(T) Pe‘e atura ‘o ‘Orava i roto i te moana tārere.
放り投げられる DR-DM NC O. LD 中 LC DF 海 張り出した
「Orava は張り出した海の中に放り投げられた。」Bodin (2018a :19)

(42)(T) Aore ra te mau Atua i pahono.
NG DM DF PL 神 PF 答える
「神々は答えなかった。」Bodin (2019 :17)

数詞が文頭に現れる事例が 2 例あった（例(43)）。

(43)(T) Ho‘ē noa rāve‘a:
一つ だけ 手段
「手段は一つだけだ。」Cuneo (undated d :6)

2.4. ハワイ語において文頭に現れる要素

今回分析したハワイ語データは合計 1036 文であった。文頭での出現が確認されたのは、接続詞、前置詞、名詞（前置詞が前置されていないもの）、疑問詞、時制・相指標、動詞（時制・相指標が前置されていないもの）、数詞である。

接続詞が文頭に現れた例は 59 例であった。例(44)、(45)はそれぞれ、等位接続詞 a「そして」、従属接続詞 inā「もし」の例である。

(44=5)(H) A ua iho aku nei lāua i lalo.
CN PF 降りる DR DM 彼ら二人 LD 下
「そして、彼ら二人は下に降りた。」Pukui & Green (1995:147)

(45)(H) Inā e hele mai kāu wahine, e hā‘awi aku ‘oe;…
もし IP 来る DR あなたの 妻 CM 与える DR あなた
「もしあなたの妻が来たら、あなたは(食べ物を)与えなさい。」Pukui & Green (1995:116)

これ以外にも、等位接続詞 akā「しかし」、従属接続詞‘oiai「~している間」が文頭に現れる例が含まれていた。

前置詞としては、およそ半数の 172 例が前置詞 i（場所/方向）の例であり（例(46)）、それに次いで多かったのが前置詞‘o（neutral case）で 78 例であった（例(47)）。更に、前置詞 no（所有/起源/原因）（例(48)）、前置詞 ma（場所（例(49)））、前置詞 na（所有/行為者）（例(50)）がそれぞれ 57 例、21 例、15 例で、上記以外の前置詞の例も計 31 例あった。

(46)(H) I loko o nā ana lākou i noho ai i loko o ka ulu lā‘au.
LD 中 PO PL 洞窟 彼ら PF 住む AP LD 中 PO DF 森
「彼らが森の中で住んでいるのは洞窟の中だった。」Pukui & Green (1995:145)

(47)(H) ‘O ka　hopena ia　o　ka ho‘oki‘eki‘e.
NC DF 結末 それ PO DF 自慢する
「それが自慢の結末である。」Pukui & Green (1995:119)

(48)(H) No Kamehameha ka ‘āina.
PO K.　DF 土地
「土地はカメハメハのものだ。」Pukui & Green (1995:156)

(49)(H) Ma lalo lāua　o　ke　ana i　hele ai;…
LD 下 彼ら二人 PO DF 洞窟 PF 行く AP
「彼らが行ったのは洞窟の下だ。」Pukui & Green (1995:150)

(50)(H) Na wai ka hewa?
PO 誰　DF 過ち
「誰のせいだ（＝過ちはだれのものだ）。」Pukui & Green (1995:124)

上記以外の前置詞では、me「~と一緒に」、mai「~から」が文頭に現れる例が確認できた。また、前節でタヒチ語に関しても言及したが、pe-で始まるいくつかの語について、本稿では前置詞の例に含めている。それは、pēnei「このように」 pēia「そのように」、pēlā「あのように/そのように」（例(51)）、pehea「どのように」（例(52)）である。いずれも Elbert and Pukui(1979:150)が pē-を類似性 (simulative)の前置詞、-ne、-ia、-lā をそれぞれ、指示詞「これ」、「それ」、「それ/あれ」、-hea を疑問詞「どれ」とする分析を採用したものである。

(51)(H) Pēlā　lākou i　hana ai no　kekahi　mau makahiki.
そのように 彼ら PF　する AP PO いくつかの PL　年
「何年かの間彼らはそのようにした。」Pukui & Green (1995:150)

(52)(H) Pehea　ko ‘olua　mana‘o?
どのように あなた達二人の 考え
「あなた達の考えはどんなだ。」Pukui & Green (1995:142)

前置詞が付加されない名詞が文頭に現れる事例については、大部分は不定冠詞(he)が文頭に来るもの（例(53)）であり 55 例あった。それに加えて、否定辞と不定冠詞の融合形(‘a‘ohe)が文頭に来るもの（例(54)）が 21 例確認された。また、時間の経過（「数日後」等）を表す句において、＜複数指標 mau＋名詞＞の形で文頭に現れるもの（例(55)）が 3 例と kekahi「いくつかの」が付加されたもの（例(56)）が 1 例確認された。それ以外に、上記のいずれにも当てはまらない、イディオム的な用法と思われるものが 6 例見られた。

(53)(H) He　wahine ho‘opunipuni ‘oe!
ID 女性　嘘をつく　あなた
「あなたは嘘つき女だ。」Pukui & Green (1995:151)

(54)(H) ‘A‘ohe i‘a a māua lā.
NG-ID 魚 私達の DM
「私達の魚は（一つも）ない。」Pukui & Green (1995:111)

(55)(H) Mau makahiki lō‘ihi ma hope mai, nalowale ua kanaka nei.
PL 年 長い LD 後 DR いなくなる DM 人 DM
「何年もの長い年の後、この人はいなくなった。」Pukui & Green (1995:107)

(56)(H) Kekahi mau lā mai, ‘ī aku ua kaikamahine nei i kona makuahine,…
いくつかの PL 日 DR 言う DR DM 娘 DM LD 彼女の母
「それから何日かして、この娘は彼女の母に言った。…」Pukui & Green (1995:117)

イディオム的な用法の例は、wahi「場所」という名詞を用いた慣用表現で wahi a X（文字通りには）「X の場所」という形でセリフを引用して「…と X は言った」という意味を表すもの(例(57))が 5 例と、比喩表現で‘ala‘ala「タコの墨袋」という名詞を用いて「役立たずだ」という意味を表す表現(例(58))である。

(57)(H) “Komo mai ho‘i hā ma loko nei,” wahi a ka ‘ōlohe.
入る DR EP LD 中 DM 所 PO DF 強盗
「『中に入りなよ』と強盗が言った。」Pukui & Green (1995:146)

(58)(H) Ma muli o kō pa‘akikī, lilo ku‘u lei ho‘okahi i k ō kaikua‘ana! ‘Ala‘ala!
LD 理由 PO お前の 頑固さ なる 私の 愛娘 一人 LD お前の 姉 役立たず
「お前の頑固さのために私のたった一人の愛娘がお前の姉のものになった。役立たず。」Pukui & Green (1995:142)

本稿では、前述の指針(6)に従い、引用符を文の境界としたため、例文(57)のコンマ以下の部分を一つの文とカウントしている。例(58)では、文脈を示す必要上から、前の文から続けて提示している。二つ目の文が前置詞も限定辞も付加されない形で文頭に現れている。例(58)の‘ala‘ala は最初の文字が大文字で他の文から独立して書かれているが、文ではなく単語を口に出しただけと考えられるかもしれない。

疑問詞が文頭に現れる例が 6 例あった。āhea「いつ（未来）」（例(59)）、ināhea「いつ（過去）」例(60)）、auhea「どこ」例(61)）の三つである。

(59)(H) Āhea e make ai ke ali‘i?
いつ IP 死ぬ AP DF 領主
「領主が死ぬのはいつか。」Pukui & Green (1995:140)

(60)(H) Ināhea nei wau i ‘ōlelo ai iā ‘oe pēlā?
いつ DM 私 PF 話す AP LD あなた そのように
「私があなたにそのように話したのはいつだ。」Pukui & Green (1995:139)

(61)(H) ‘Auhea ku‘u mau kaikamāhine?
どこ　私の PL 娘たち
「私の娘たちはどこだ。」Pukui & Green (1995:146)

時制・相指標が文頭に現れる例は 230 例であった（例(62)）。

(62)(H) Ua ha‘alele ‘o　Makanikeoe i　kona　hale.
PF 去る　NC M.　AC 彼女の 家
「Makanikeoe は彼女の家を去った。」Pukui & Green (1995:118)

例文(62)では完了を表す時制・相指標 ua が文頭に来る例であったが、この他に文頭に現れるのが確認された時制・相指標は、e（未完了/命令）、ke（条件「~なら」）、ke（動詞に後置される指示詞と共に用いて現在「~している」）、mai(否定命令)、ō（命令「~した方が良い」）、i（完了）、a（同時）[3] である。

時制・相指標が付加されず、直に、動詞が文頭に現れる文は 271 例あった（例(63)）。その中には、いずれも時制・相指標と共起しない特殊な動詞も含まれている。それは、否定動詞 32 例（例(64)）、存在動詞 7 例（例(65)）、接近方向を表す方向詞 mai を「こっちによこせ」という意味で動詞的に用いた慣用的用法（例(66)）の 3 例が含まれている。

(63)(H) ‘Ae　nōho‘i ke　ali‘i i　kā lākou noi.
同意する EP　DF 領主 LD 彼らの 要求
「領主は彼らの要求に同意した。」Pukui & Green (1995:132)

(64)(H) ‘A‘ole au i ‘ike.
NG　私 PF 知る
「私は知らない。」Pukui & Green (1995:151)

(65)(H) Eia　kō　‘ai　me　kō　i‘a!
ここにある あなたの 食べ物 ~と あなたの 魚
「ここにあなたの食べ物とあなたの魚がある。」Pukui & Green (1995:133)

(66)(H) Mai,　na‘u ka i‘a!
こっちによこせ 私の DF 魚
「こっちによこせ、魚は私のものだ。」Pukui & Green (1995:132)

数詞が文頭に現れる文は 10 例あった（例(67)）。

(67)(H) ‘Elua　kanaka i　hiki　aku i　kahi　o　Nānaele e　noho ana,…
二つ 人　PF 到着する DR PF 場所 PO N.　IP 住む DM
「Nānaele が住んでいる場所に着いた人は二人だ。」Pukui & Green (1995:135)

2.5. 三言語間の文頭出現要素の比較

前節までに述べた三言語における要素別の文頭での出現率は表 1 のようにまとめられる。

表１：要素別文頭出現率

		SAM		TAH		HAW	
conjunction		177	8.0%	13	2.7%	59	5.7%
preposition	preposition *‘o*	394	17.9%	17	3.5%	78	7.5%
	preposition *i*	1	0.0%	45	9.3%	172	16.6%
	others			29	6.0%	109	10.5%
	pē- (simulative)			1	0.2%	15	1.4%
noun (without a preposition)	indefinite	3	0.1%	44	9.1%	55	5.3%
	negative+indefinite					21	2.0%
	others	2	0.1%	27	5.6%	10	1.0%
interrogative		2	0.1%			6	0.6%
tense-aspect marker		1080	49.1%	198	40.8%	230	22.2%
verb (without a tense-aspect marker)		113	5.1%	109	22.5%	271	26.2%
ona (sequence)		402	18.3%				
numeral				2	0.4%	10	1.0%
pē/*po* (question/selection)		11	0.5%				
adverb (placed before a predicate)		16	0.7%				
total		2201		485		1036	

表１から読み取れる傾向のうち、主なものは、以下のようにまとめられる。

(68) 表 1 から読み取れる主な傾向

a) 前置詞‘o の出現率がサモア語が他の二言語に比べて突出して高い。

b) 前置詞 i とその他前置詞の出現率はタヒチ語とハワイ語がサモア語に比べて高い。

c) 前置詞なし名詞句の出現率がサモア語でとりわけ低い。

d) 前置詞なし名詞句のうち、不定冠詞を伴わないものの出現率がタヒチ語で高い。

e) 時制・相指標が付加されていない動詞の出現率がサモア語で著しく低い。

f) 時制・相指標が付加されていない動詞の出現率がハワイ語で高い。

最も注目すべき点は、文頭における前置詞の出現率である。特に前置詞‘o（neutral case）と前置詞 i（場所/方向）は三言語が共有する要素であるにもかかわらず、サモア語では前置詞‘o の出現率が 17.9%とかなり高いのに比べて、タヒチ語では 3.5%、ハワイ語では 7.5%と低く、サモア語と他の二言語との間に顕著な差がある。一方、前置詞 i の出現率はサモア語

では今回僅か 1 例しかなかったのに対して、タヒチ語では 9.3%、ハワイ語では 16.6%とかなり高くなっている。また、前置詞‘o と i 以外の前置詞の出現率は、サモア語では今回は該当例がなかったのに対し、タヒチ語では 6.0%、ハワイ語では 10.5%と相当数の事例が確認されている。このことから、サモア語と他の二つの言語との間では、前置詞‘o が用いられる環境、或いはそれが持つ役割、裏を返すと‘o 以外の前置詞が使われる環境及びその役割、に何か大きな違いがある可能性を示唆している。

前置詞を伴わない名詞句の文頭での出現率はサモア語では不定冠詞が付加される例が 0.1%、不定冠詞が付加されない例が 0.1%とほとんどないのに対して、タヒチ語では不定冠詞が付加される例 9.1%で不定冠詞が付加されない例 5.6%、また、ハワイ語では不定冠詞が付加される例が 5.3%、否定辞と不定冠詞の融合形が出現する例が 2.0%、不定冠詞が付加されない例 1.0%となっている。このように、サモア語以外の二言語で前置詞が前置されない名詞句の出現率が高めとなっている。このことから、文頭における名詞句の扱いについて、やはり、サモア語と他の二言語で差異が有る可能性を示唆している。また、前置詞も不定冠詞も付加されない名詞句が文頭に出現する出現率はタヒチ語が 5.6%なのに対して他の二言語では著しく低い。タヒチ語特有の事情がある可能性を示唆している。

時制・相指標が付加されていない動詞の文頭での出現率が、タヒチ語で 22.5%、ハワイ語で 26.2%なのに対して、サモア語では 5.1%と著しく低くなっている。サモア語でもタヒチ語でも時制・相指標の出現率（サモア語では 49.1%、タヒチ語では 40.8%）が、時制・相指標が付加されていない動詞の出現率（サモア語では 5.1%、タヒチ語では 22.5%）よりも高いのに対して、ハワイ語では、時制・相指標が付加されていない動詞の出現率（26.2%）の方が時制・相指標の出現率（22.2%）より高くなっている。ハワイ語における時制・相指標が付加されていない動詞の用いられる環境が他の二言語と異なっている可能性を示唆している。

尚、表 1 で数字が表示されていない欄は今回該当例が含まれていなかった箇所である。このうちいくつかは、そもそも対応する形式がその言語に存在しない場合である。noun (without a preposition)の中の negative+indefinite は、前置詞は伴わず、否定辞と不定冠詞の融合形が付加された名詞句が文頭に現れる事例であるが、否定辞と不定冠詞の融合形はハワイ語特有の形式であり他の二言語には存在しない。また、ona (sequence)は＜ona-動詞-(ai)-lea＞「(そして/それから…」という形でイベントの連続を示すものであるが、サモア語特有の構造であり、他の 2 言語には存在しない。同様に adverb (placed before a predicate)（述語の前に付加される副詞）もサモア語では比較的高い頻度で用いられる語類であるが、他の言語では一般的でない。類似を示す前置詞と分析される *pē*- (simulative)はタヒチ語とハワイ語に見られる形式で、疑問や選択を表す時に用いられる *pē*/*po* (question/selection)はサモア語特有の形式であるが、用法等に付いては一部重なる部分もあり、元々は同起源である可能性もあるが、今回はそれについての議論には深入りしないこととする。numeral（数詞）の欄がサモア語だけ空欄となっているが、これは、サモア語においては数詞は動詞の下位分類とされ、振る舞いも動詞とほぼ同様であり、今回の分析でも動詞の中に含めているためである。ちなみに、タヒチ語とハワイ語の数詞は振る舞いが動詞とよく似ている部分もあるものの、限定詞的な特徴も強い

ため、動詞とは別扱いとしている。

タヒチ語だけ、interrogative（疑問詞）の欄が空欄になっている。この interrogative（疑問詞）の欄は、それ以上分解できない一語として使われる疑問詞が文頭に出現する割合を指している。従って、疑問詞の前に前置詞が付加されたり、時制・相指標が付加されたものについては、それぞれ、前置詞の欄、時制・相指標の欄に含まれている。今回分析したタヒチ語のデータの中には疑問詞単体で文頭に現れる例は含まれていなかったが、＜前置詞＋疑問詞＞という形式が文頭に来ている例は複数例確認されている（例(69)）。これらは、疑問詞としてではなく、前置詞としてカウントしている。

(69)(T) Na hea taua ia ho‘i ?
PO どの 私達二人 OP 戻る
「戻るには私たちはどうしたらいいでしょうか。」Cuneo (undated c:9)

例(69)では、前置詞 na（所有）と疑問詞 hea「どの」を合わせる形で「どのように」という意味の疑問表現となっている。しかしながら、今回のデータにはたまたま含まれていなかったが、タヒチ語においても、疑問詞が単体で文頭に現れることはある（例(70)）。

(70)(T) ‘Afea ‘oe e reva ai?
いつ あなた IP 出発する AP
「あなたはいつ出発するのか。」Fare Vāna‘a. (1986:179)

今回は、会話文ではなく、物語文をデータとしたため、疑問詞が使われる頻度はそもそも低いこともあり、また、他の二言語に比べてタヒチ語のデータの量が少なかったため、たまたま該当する例が含まれていなかった可能性がある。

3. 三言語の異なる形式間の対応

3.1. サモア語の前置詞‘o と他の二言語の前置詞との対応

この章では、表 1 で見たような言語間の違いを引き起こしている要因について、言語間でどの形式がどのように対応しているかを中心に論じる。

まず、(68)の a)と b)、すなわち、前置詞‘o と他の前置詞の出現率の違いについて考察する。サモア語では専ら前置詞‘o の出現率が高く、他の二言語では他の前置詞の出現率が高い。これを引き起こしている要因は、タヒチ語やハワイ語で他の前置詞が担っている機能が、サモア語では前置詞‘o に集約されていることだと考えられる。

サモア語では、文頭に現れる場所、時間、理由、様々な機能を持つ名詞句について、一貫して前置詞‘o が付加される。一方で、タヒチ語やハワイ語では、例えば、場所、時間、理由などを表す名詞句には、前置詞 i（場所、時間）や、no（理由）等、その名詞句の機能に沿った様々な斜格前置詞が付加される。

＜場所＞

(71)(S) ‘O　fea　o　i ai　le oso　ma　　le　naifi.

NC どこ PS ある DF 堀棒 ～と DF ナイフ

「堀棒とナイフはどこにある。」Stuebel and Herman (1987:20)

(72)(T) I　Taha‘a matou e noho ai　te parataito o　te vanira.

LD T　　.私達 IP 住む AP DF 楽園　PO DF バニラ

「タハアに私たちは住んでいる、バニラの楽園だ。」Cuneo (undated f:3)

(73)(H) I　loko o nā　ana　lākou i　noho ai　i　loko o ka　ulu lā‘au.

LD 中　PO PL 洞窟 彼ら PF 住む AP LD 中　PO DF　森

「彼らが森の中で住んでいるのは洞窟の中だ。」Pukui & Green (1995:145)

＜時間＞

(74)(S) ‘O　le aso 4 o　Aokuso 1890 ua　taunu‘u　ai　nei mea uma.

NC DF 日 PO　8 月　　PF 実現する AP DM こと 全て

「この全ては 1980 年 8 月 4 日に起こった。」Stuebel and Herman (1987:74)

(75)(T) I　te　po‘ ipo‘ i roa　ra　to‘u　papa e to‘u p　apa feti‘i i　te　arara‘a

LD DF 朝　　とても DM 私の 父　～と私の おじさん LD DF 起きること

no　te fa‘aineine　i　te　ahimā‘a.

PS　DF 用意する AC DF 地中オーブン

「朝早くに私の父とおじさんが地中オーブンを用意するために起きる。」

Cuneo (undated e:6)

(76)(H) I　ia　pō nō i　make ai　‘o　Kamehameha I.

LD その夜 EP PF 死ぬ AP NC　K.

「その夜にカメハメハ 1 世が死んだ。」Pukui & Green (1995:140)

＜理由＞

(77)(S) ‘O le　mea　lea　sa　fai　ai nisi　　fale laiti　‘o　ali‘i　Samoa.

NC DF こと この PT する AP いくつかの家 小さい NC 領主 サモア

「このようなことでサモアの王たちは小さい家々を作ったのだ。」

Stuebel and Herman (1987:48)

(78=33)(T) No te　mā‘a　paha ‘o ia　i　haere mai ai.

PO DF 食べ物　多分 それ PF 来る DR AP

「それが来たのは多分食べ物のせいだ。」Cuneo (undated e:8)

(79)(H) No kēia　kumu i　hea　‘ia ai　kēlā lua ‘o　Kaluakoko.

PO この 理由 PF 呼ぶ PA AP その 穴 NC　K.

「その穴はこの理由で Kaluakoko と呼ばれた。」Pukui & Green (1995:151)

このように、タヒチ語とハワイ語では、場所や時間の名詞句には前置詞 i、理由の名詞句には前置 no と、名詞句の機能に応じて異なる前置詞を用いてるのに対し、サモア語では全て前

置詞‘o が用いられている。サモア語の前置詞‘o は、タヒチ語やハワイ語で他の様々な前置詞が文頭で担っている意味もカバーしているため、出現率が著しく高いと考えられる[4]。

3.2. タヒチ語とハワイ語の間の前置詞付加の有無についての対応

次に、(68)の c)と d)、すなわち、前置詞が付加されない名詞句の出現率の違いについて考察する。まず、ハワイ語とタヒチ語では不定冠詞の前には前置詞が付加されないという原則がある[5]。例えば、ハワイ語の場合には、定冠詞が付いた名詞句が文頭に来る場合、何らかの前置詞が付加される（例(80)）が、不定冠詞の場合には前置詞は付加されない（例(81)）。

(80=47)(H) ‘O ka hopena ia o ka ho‘oki‘eki‘e.
NC DF 結末 それ PS DF 自慢する
「それが自慢の結末である。」Pukui & Green (1995:119)

(81=53)(H) He wahine ho‘opunipuni ‘oe!
ID 女性 嘘をつく あなた
「あなたは嘘つき女だ。」Pukui & Green (1995:151)

タヒチ語においても同様に、不定冠詞の前には前置詞は付加されない。タヒチ語とハワイ語で不定冠詞が文頭に現れることが多いのはこのような理由によると考えられる。

不定冠詞が付いた名詞句が文頭に現れる事例は、タヒチ語でもハワイ語でも一定数見られる。しかしながら、前置詞が付加されない名詞句のうち、不定冠詞が付加されていないものの文頭での出現率を見るとタヒチ語がハワイ語に比べて高い。このことは、以下の二つのタヒチ語の傾向により説明される。ハワイ語と同様にタヒチ語でも不定名詞句が述語になる場合は、前置詞は付加せず、不定冠詞が文頭に来る（例(82)）のだが、タヒチ語においては名詞 mea「もの」の前で不定冠詞 e がしばしば脱落する（例(83)）傾向があること。もう一つは、定名詞句が述語になる場合には、冠詞又は指示詞の前に前置詞‘o が付加される（例(84)）のが基本であるが、この場合の前置詞‘o がしばしば脱落する（例(85)）傾向があることである。

(82)(T) E mea maita‘i roa ‘oe,…
ID もの 良い とても あなた
「あなたはとても良い人だ。」Cuneo (undated a:7)

(83)(T) Mea maita‘i roa e ta‘u tamaiti iti, tē ha‘apa‘o maita‘i nei ‘oe i
もの 良い とても VC 私の 子供 小さい PS 世話する良く DM あなた AC
tā ‘oe mau pua‘ahorofenua.
あなたの PL 馬
「（お前は）とても良い、私の坊やよ、お前はお前の馬たちを良く世話している。」
Cuneo (undated d:10)

(84)(T) ‘o　te　reo　ia　　o Papi
NC DF 声　それ PS P.
「それは Papi の声だ。」Cuneo (undated c :9)

(85)(T) Te reo ia　　o　Hina.
DF 声　それ PO H.
「それは Hina の声だ。」Cuneo (undated a:12)

例(82)と(83)、例(84)と(85)は、それぞれ、ほぼ同じ文であるが、例(83)と(85)では、それぞれ、不定冠詞 e と前置詞‘o が脱落している。しかしながら、ハワイ語ではこのような脱落は稀である。このように、タヒチ語の、不定冠詞や前置詞‘o がしばしば脱落することがあるという傾向が、前置詞が付加されない名詞句の文頭での出現率の違いに反映していると考えられる。

3.3.　ハワイ語の文頭に現れる動詞とサモア語の ona が導く句との対応

最後に、(68)の e)と f)、すなわち、時制・相指標が付加されていない動詞の文頭出現率の違いについて考察する。サモア語において、時制・相指標が付加されていない動詞の文頭出現率が著しく低く、一方で、ハワイ語において、時制・相指標が付加されていない動詞の文頭出現率が高めになっている。これは、サモア語とハワイ語の物語スタイルで多用される形式が異なることによるものと考えられる。2.5 節において、サモア語特有で他の二言語には見られない構造として、イベントの連続を示すのに用いられる＜ona 動詞(ai) lea＞「（そして/それから）…」に言及した。表１において ona (sequence)はサモア語で 18.3%とかなり出現率は高い。この形式は、特に物語スタイルの文で高頻度で多用されるものであり、しばしば、複数連続でも用いられるものである（例(86)）。

(86)(S) <u>Ona</u> la　　momoe <u>ai lea</u>. <u>Ona</u> la　　faalogo atu <u>lea</u>　ua sau　le ali‘i.
SQ 彼女ら二人 寝る AP DM SQ 彼女ら二人聞く DR DM PF 来る DF 領主
<u>Ona</u> nofo　<u>ai　lea</u>　‘o　Taema.
SQ 結婚する AP DM　NC T.
「（そして彼女らは<u>寝た</u>。そして領主がやって来るのを<u>聞いた</u>。そして（彼と）Taema は<u>結婚した</u>。」Stuebel and Herman (1987:34)

このように、＜ona 動詞(ai) lea＞は物語の中で、イベントを連続的に述べていく際の一般的な手法である。ona で始まる文は動詞文と名詞文のどちらに分類すべきか不明確なこともあり、表１では名詞とも動詞とも別に分類している。ハワイ語にも、物語スタイルの文章特有の、連続したイベントを述べるのに多用される形式がある。それは＜動詞-方向詞-指示詞＞である。サモア語の＜ona-動詞-(ai)-lea＞と意味的に対応するだけではなく、出現頻度の高さも類似しており、例(86)と同様に複数連続で用いられる点も同様である（例(87)）。

(87)(H) Hele aku nei ‘o Kānekoa i kapa alanui e like me ka mea ma‘a mau iā ia;
行く DR DM NC K. LD 側 道 IP 同じ ~と DF こと いつもの LD 彼
‘ike aku nei ‘o ia i ka ‘ohana o ka wahine e hele mai ana. Nuku mai nei ka
見る DR DM 彼 AC DF 家族 PO DF 妻 IP 来る DR DM 叱る DR DM DF
makua hūnōai wahine, a holo mai nei ka hūnōna hou me ka
義理の母 そして 走る DR DM DF 義息 新しい ~を持って DF
paukū lā‘au e pepehi iā Kānekoa.
切れ端 木 IP 殺す AC K.
「Kanekoa はいつも通り道端に行った。（そして）妻の家族がやってくるのを見た。（そして）義母が叱りつけてきて、そして、新しい義息が Kanekoa を殺そうと棒を持って走ってきた。」Pukui & Green (1995:116)

例(87)では、＜動詞 aku nei＞、＜動詞 aku nei＞、＜動詞 mai nei＞、＜動詞 mai nei＞と 4 回連続で出現している。ちなみに、aku は「離散」、mai は「接近」を表す方向詞(DR)であり、nei は「近称」の指示詞(DM)である。

同じような状況でかつ同じような意味で、しかも同じく高頻度で用いられる形式が、サモア語では＜ona-動詞-(ai)-lea＞と動詞の前に ona が付加されているのに対し、ハワイ語では＜動詞-方向詞-指示詞＞と、動詞が先頭に来る形式となっている。このことが、サモア語で時制・相指標が付加されていない動詞の文頭出現率が著しく低く、一方で、ハワイ語で時制・相指標が付加されていない動詞の文頭出現率が高めになっている原因と考えられる。

4. 結び：文を構成するうえでの原則についての三言語間の違い

これまでの分析結果から、文頭要素について、三言語間で文を構成するうえでの根本的な原則に大きな違いがあることが明らかとなった。動詞が述語の中核になる文については細かい違いはあるものの大きな原則は共通であると考えらえる。しかしながら、名詞が述語の中核となる文については、かなり大きな差がある。サモア語においては、基本的に、文頭に来る名詞には前置詞‘o が付加される。一方、ハワイ語においては、文頭名詞句には何らかの前置詞または不定冠詞 he が付加される。タヒチ語においては、ハワイ語と同様の原則はあるものの、若干緩いものとなっている。文頭名詞句についての三言語の違いは以下のようにまとめることが出来る。

(88) 文頭名詞句についての原則：
文頭に現れる名詞句は
サモア語：その機能に関わらず前置詞‘o が付加される。
ハワイ語：前置詞かまたは不定冠詞が付加される。
タヒチ語：原則はハワイ語と同様だが定冠詞・指示詞が文頭に来ることもある。

謝辞

* 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 25370455「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」の一環である。

注

[1] 本稿で扱う三つの言語を区別するため、例文を提示する際には番号の後にサモア語、タヒチ語、ハワイ語をそれぞれ、(S)、(T)、(H)のように表記する。

[2] 本稿で用いる略語は以下のとおりである。AC：対格、AP：前方照応、CM：命令、CN：接続詞、DF：定(definite)、DM：指示詞、DR：方向詞、EP：強調辞、GN：一般時制、ID：不定(indefinite)、IP：未完了、LD：前置詞（場所/方向）、NC：前置詞(neutral case)、NG：否定、OP：願望法、PA：受動態、PF：完了、PL：複数、PO：所有、PS：現在、PT：過去、QU：疑問、SQ：連鎖的イベント、VC：呼びかけ。

[3] この a については、Elbert and Pukui (1979:164)は様々な意味を持つ接続詞としているが、用いられる環境によって意味が変わることから、本稿では、暫定的な分析として、前置詞「~まで」、時制・相指標（同時）、接続詞「そして（等位接続詞）」のように区別する。a の位置づけについては更なる分析が必要である。

[4] サモア語において、名詞句の機能に関わらず前置詞‘o が付加されるのはあくまでも文頭に現れる場合に限ったことである。文中では、それぞれの名詞句の機能に応じて‘o 以外の前置詞が付加される。例えば、以下の例では、場所を表す名詞に前置詞 i（場所/方向）が付加されている。（場所の名詞句を下線で表示）

例‘O le ali‘i sa nofo <u>i le fanua i le va o Afega ma Malie.</u>

NC DF 領主 PT 住む LD DF 土地 LD DF 間 PO A. ~と M.

「領主は Afega と Malie の間の土地に住んだ。」Stuebel and Herman (1987:44)

[5] サモア語においては不定冠詞の前に前置詞が付加される一方で、タヒチ語とはハワイ語では前置詞が付加されないことの説明としては、本稿では、塩谷（1996）によるタヒチ語とハワイ語では前置詞‘o の機能が不定冠詞に統合されたとする分析を採用する。

参考文献

Bodin, Melinda. (2018a) *Te ‘Ā‘ai o ‘Orava, te Fe‘e.* Faaa (Tahiti) : ‘Ānāpape Éditions.

Bodin, Melinda. (2018b) *Te ‘Ā‘ai o Taita‘a.* Faaa (Tahiti) : ‘Ānāpape Éditions.

Bodin, Melinda. (2019) *Te ‘Ā‘ai o Tahiti.* Faaa (Tahiti) : ‘Ānāpape Éditions.

Clark, Ross. (1976) *Aspects of Proto-Polynesian Syntax*. Te Reo monograph. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.

Cuneo, Taema. (undated a) *Tini, te i‘a i herehere ia Hina*. Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Cuneo, Taema. (undated b) *Ho‘e hoa a‘au aroha.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Cuneo, Taema. (undated c) *Fa‘aorahia e te mau tohora.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Cuneo, Taema. (undated d) *Te Pua‘ahorofenua i mua i te ‘ati.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Cuneo, Taema. (undated e) *Tā‘u tamure mātāmua.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Cuneo, Taema. (undated f) *Te tauturuta‘a i te ra ia Teani.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Collection Fenua (undated a) *Te tamaiti fa‘atoa.* Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Collection Fenua (undated b) *Te ma‘o fa‘ahiahia*. Pirae (Tahiti) : Éditions Vahine.

Elbert, Samuel H. And Mary K. Pukui. (1979) *Hawaiian grammar. Honolulu* : University of Hawaii Press.

Fare Vāna‘a. (1986) *Grammaire de la langue tahitienne*. Papeete (Tahiti) : Acádemie Tahitienne.

Heuberger, Nelly et al. (1994) *Te Remu ‘Ura*. Papeete (Tahiti) : Association Pererau.

Macedo, Sergio. (2000) *Honu iti e*. Pirae (Tahiti) : CTRDP.

Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. (1992) *Samoan reference grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.

Pukui, Mary Kawena and Laura S. Green. (1995) *Folktales of Hawai‘i.* Honolulu : Bishop Museum Press.

塩谷亨. (1996) 「ハワイ語の he の統語的性質」.『日本言語学会第 113 回大会予稿集』, pp. 253-258.

Steubel, C. and Brother Herman. (1987) *Tala o le Vavau*. Revised and reprinted edition. Auckland : Polynesian Press.

執筆者紹介
氏名：塩谷亨
所属：室蘭工業大学ひと文化系領域
Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp